

令和5年度「地域づくりシンポジウム」報告書

日 程	令和5年12月12日(火) 18:45~21:00
場 所	問寒別生涯学習センター 多目的ホール
参加者等	<ul style="list-style-type: none"> ○地域住民:27人 ○講師:2人 <ul style="list-style-type: none"> ・NPO 法人上美生 理事 蘆田 千秋 氏 ・住民活動団体「つむぎ」代表 村上 朋子 氏 ○関係者:4人 <ul style="list-style-type: none"> ・北総研:石井氏、牛島氏、小野塚氏 ・やまチ:神長氏 ○町:8人 <ul style="list-style-type: none"> ・野々村町長、岩川副町長 ・住民生活課:村上課長、山下課長補佐、秋山主査、小林主事、渡邊主事 ・総務企画課:渡邊主事(広報) <p>計:41人</p>

町挨拶:野々村町長

令和5年も瞬く間に月日が過ぎ、師走を迎えた中、ご参加の皆様におかれては大変お忙しいところ地域づくりシンポジウムにご出席いただきありがとうございます。

問寒別地区における地域の持続性を考える町の取り組みも、令和元年から始まって早5年が経ちました。この5年の中では新型コロナウイルス感染症の蔓延などで、地域活動や町の取り組みも停滞することがありましたが、その中でも地域と行政で工夫を凝らしながら地域の取り組みを続けてきました。

今年に入って地域の未来の姿とそれに向けた具体のとりまとめの「地域づくりビジョン」を地域の皆様とつくり、これをもとに地域の新しい仕組み作りとして地域運営組織の形成に取り組んできました。

こうした中、本日、芽室町の蘆田様、厚真町の村上様をご講師でお迎えし、具体的な地域活動のご様子をご紹介いただくことで、私たちの地域での取り組みに活かしていく大変貴重な機会をいただきました。

私たちの地域での取り組みに活かしていく大変貴重な機会をいただくので、お越しのお二方におかれてはご多忙な中、遠路はるばる問寒別までお越しくくださったこと心から感謝申し上げます。それぞれ講師の地域でも大きな課題を前にどのように考えていったのか伺いすることができると思います。

一方、徐々に進行していく地域の衰退は地域にそれぞれ受け入れていく時間があって自然とそういうものだと諦めに似た納得感も生じることもあります。ただそれではいつの間にか人が住まうことのできない地域になってしまいます。人の暮らしがあって初めて町が存続するので、この人も暮らしを維持し町を作ることが地域を守っていくことだと私は確信しています。

これからの問寒別、そして幌延町、地域と行政で総力を挙げて共に考え、つくっていくために今日会場の皆さんとともに一緒に学びたいと思っています。お越しのお二方と参加の皆様とで和気あいあいとたくさんの気付きや実りを生み出すことができるよう、ご祈念を申し上げ挨拶とさせていただきます。

本日はよろしく申し上げます。

町事業説明：山下課長補佐

◎地域コミュニティ形成事業（問寒別モデル）

- ・テーマ：持続可能な地域集落をどのように作っていきけるか
- ・必要なもの：集落に必要な機能を提供する集落支援センターとセンターを運営する地域運営組織
- ・これからのまちづくりの姿
 - 今まで地域と行政の大きな2つの枠組み主体
 - 担い手不足で難しくなってきた
 - その部分を地域運営組織が担っていく
- ・地域運営とは：皆さんが地域で住み続けていくのに必要な身近な仕事。これを地域全体で考えて実践していく。今まで地域がボランティアで行っていた部分を専属の担い手が組織として行う
- ・問寒別においては？
 - 専属の職員が実働部分を担うことで地域の負担を軽減
 - 住宅周辺の除雪や草刈り、または地域交通などを担う役割を担う
 - これらによって地域住民の外出機会の増加や地域で住み続けられる環境の提供ができる
 - 地域運営組織が地域の皆様の核になるような応援をいただきながら、サービスを展開していく
 - これまでは地域住民がボランティアとして支えていた活動を、これからは給料をもらって専属で地域活動を行う人たちがいることで地域の負担を軽減していけるのではないか
 - 町としても、地域運営組織を支援する国からの700万円の交付税を活用したり、設立のための準備金も準備し、人的にも財政的にも支援していく体制を作っていく
- ・今日のシンポジウムの講師はすでに地域に必要な課題を考えながら取り組みを実践している。ぜひ問寒別にどう当てはめることができるのか考えていきたい

事例紹介1:「上美生の地域活動を通して ～ ちいき・わたしはどうかわっていったんだろう ～ 」

－ 芽室町 NPO 法人上美生 理事 蘆田 千秋 氏

(上美生ほしぞらプラン会議代表)

○地域紹介

- ・といかんは牛屋さんが多い地域と思うが、上美生も畑と牛が半々ほど
- ・芽室町は人口 1.8 万人弱いるが、上美生に移住してきた頃(2004年)は500人ほどだった人口が今は400人ほど
- ・芽室市街から16km 離れており、列車もバスもない
- ・上美生は真ん中に市街があって、周りに6つの地域があり、全体合わせて上美生地域
- ・ヤマザキショップは2018年に農協の閉店を機に引き継いだ
- ・「上美生地区協議会」、「上美生ほしぞらプラン会議」、「NPO 法人上美生」の3団体の話

○「ほしぞらプラン会議」発足

- ・なんとなく地域を感じる衰退感があったが、迫る危機感はない感じだった
- ・そんな中、連合町内会のような組織(上美生地区協議会)の中で10年後の地域を考える会誕生
 - 当時の町長が上美生出身で、地域として地域の未来をしっかりと考える枠組みをつくって行政に要望するようにアドバイスがあった
 - 「ほしぞらプラン会議」発足
- ・目指すことは大きなことではなく、きれいな星空をずっと見続けていきたい。地域に住み続けていかないと、その星空を見続けられないという思いからこの名前になった

○「ほしぞらプラン会議」活動

- ・高校生以上全員アンケート:まずは地域を知る、それをまとめて年度末にフォーラムで発表
 - 自由記載欄は公表しない
 - 「今の暮らしで何が不安か」、「これから住み続けたいか」、「お店の存続について」など様々な質問項目を設定
- ・農水省農村集落活性化事業採択:初年度は将来ビジョンの策定を目指した。その結果、「北極星はどこだ」というテーマに決定した。なんとなくみんなが向かう先となる「北極星」を目指す
- ・ワークショップを4回開き、地域資源や地域の思いをみんなで共有
- ・年を取ってからの除雪と将来の交通について対策となる社会実験実施
 - 通りがかりの人がついでに除雪できる仕組み(置きスコップ)と、バスがなく搾乳の時間に子供たちを送り迎えできない住民のために交通実験
- ・将来ビジョン「農・風・人・育む・上美生(のーとはぐくむかみびせい)」:外(移住者)からの風、地域資源や子供たちを育む、など様々な思いが込められた
- ・フォーラム開催:取り組みの優先度を表でまとめてシールで優先順位を洗い出し。地域の人とそれ以外の人では優先順位が異なるが分かった
- ・これを踏まえて、「どのように取り組めばいいか」、「どのようにこの思いを実現しようか」、「どのように上美生らしさを出していくか」をみんなで考えた
- ・今ある環境をどう利用していくか。また背伸びしすぎないで身の丈に合った活動をしていこう。失敗してもいろんなアイデアがあるからと考えていった

- ・ほしぞらプランでは、いろんなことを試していった
- ・そのころ、農協閉店後の話も出てくる

○農協について意見交換会

- ・地域としては、お店が必要。地域として運営していくことを決意
 - それを機に NPO 上美生発足
- ・株式会社か NPO 法人か議論になったが、店だけでなく、地域のことや子供たちの課題解決もやっていきたいという点で、NPO 法人の組織形態に決定
 - 資金として地域を回って 700 万円集めた
 - 農業や子供やお年寄りなど、地域のことを考え活性化を考えられるというモットー
 - 農協閉店から引き継ぎ、皆で大忙しで準備
 - 店名は「みんなのお店 KAMIBI」で、子供たちの意見で決めた
 - 仕入れが一番自由が利くヤマザキショップ
 - 農協の事務所を改装して、ふれあい広場「ひだまり」
- ・NPO の発足とともに様々な事業も検討し開始
 - 地域交通「KAMI 便」
 - お試し移住の仕組みも新しい活動として検討

○C カンパニー：地域のすきま仕事を集めてビジネスにする会社を設立

- ・農繁期の農家さんのお弁当の要望から発足
- ・地域のちょっとした需要を埋める

○活動評価

- ・あとから取り組みの優先度のリストを振り返ってみると、課題として多くの方が投票していたことへの対策が達成できている
- ・課題を一人でやらない。みんなでやる。継続していく。みんなでカバーしていく。そしてみんながつながれるイベントをやっていく

○課題への取組と進め方

- ・2023 年になって、地域の危機感が増してきた
- ・コロナもあって、活動が復活できるのかという停滞
- ・想いを伝えることはとても難しいが、自分たちの意見を言うよりも、他の人の思いをもっと聞いて、共感できると輪が広がっていくのではないかな…
- ・コミュニケーションを直接とって利用者に寄り添うこと
 - 使って使ってと言うより、利用者のやろうとしていることを汲むことで課題解決に繋げていく
 - ひだまり(憩いの場)の利用を増やすことを考えたときに、放課後に部活行く子へのおにぎりを出す
 - おじいちゃんがお店に常連になってくれるだけで安否確認になる…など

○といかんべつとかみびせい

- ・といかんとかみびは共通点が多い
 - 独自文化
 - 地域に小中学校があり、子供たちを中心に地域イベント
 - いろんな味のある人がいる
- ・これからも相互交流連携を…

事例紹介2:「わがまち わがこと ～ 目指せ 現代版:江戸時代の長屋コミュニティー ～ 」

- 厚真町 住民活動団体「つむぎ」代表 村上 朋子 氏
(「tacoo cafe (タクーカフェ)」店長、(株)おでん)

○紹介

- ・地域:厚真町人口4,300人で、稲作やハスカップが有名で海では年中サーフィンできる
- ・講師:江別で生まれ育ち、看護師になる。沖縄やオーストラリアにいき、日本に帰国して家族と母で終の棲家として厚真町に移住。夫はサーフショップ、自身は着物で小物やバッグを作りスローライフを目指す
 - 役場の地域包括支援センター職員になる。その後、社会福祉協議会で正職員に。その時に震災がおり、その際はニーズマッチング班にて支援。生活支援相談員の総括業務に就く。地域支えあいセンターの設置。町から社協へ包括支援センターが移管され管理者となる
 - 社協を退職し R3に住民主体の任意団体「つむぎ」設立し、任意団体とは別にカフェ開店
 - カフェで出会った方や地域の流れの中で、協力隊と別の町の元役場職員の3人で(株)おでん設立

○組織の限界

- ・行政と社協では福祉・相談支援業務をしていたが、様々な問題の相談を受けるが、すべての課題を町で解決することはできず出口が見えない状況
 - センターの役割で社会資源の発掘等があるが、組織にいたら地域とつながれない
 - 開拓以降地域の様々な支えあい機能を作ってきたが、自治会に支えあい機能を求めない世代が増えてきて、様々な活動が解散になったり停滞したりしていた
 - なんとなく課題と思っていたことが震災で顕在化
 - 住民たちは自ら主体的に進めていくのは難しいと思っており、まちの役立ちたい何かしようと思った
- ・集落全部を回って、要人と会い、起業した人や外部の人ともつながりができ、その人たちを組み合わせたら面白そうと気づき自らで地域づくりを目指すことを決意

○活動開始

- ・「あつま元気クラブ」:震災から2年のタイミングで発足し、週2回体操教室開催。最初は3人だったが徐々に増加
 - かご編みの技術持つ人を組み合わせ、かご編みを増産し、活動費を捻出
 - SNS で発信すると、意外と地域の人が見ていて購入してくれる
- ・コミュニティセンター:集落支援員が管理人をしているが人が来ない課題があったので、そこで元気クラブでアレンジ教室を開催し、農閑期に住民が集まる場を創出

○地域交流拠点カフェ

- ・地域交流拠点機能をもつカフェでイベントや教室も抱き合わせて運営
- ・地域交流に興味がある人たちが集まってくるので、お客さん同士で新しい地域の話が生まれる
- ・その中で「あつまマル市」を開催し、出会いの掛け算で専門職などが集まるコミュニティ形成

○人材が人材を呼ぶ展開

- ・Uターンしてきた若者を巻き込み、体操教室
- ・隣町の看護師さんが子どもたちを遊ばせる場所として元気クラブを活用
- ・個人事業主で子供のことを何でも知っている人が一人で放課後子ども教室を実施していたが、デイサ

ービスのセンター長と組み合わせ、住民も来られるようなデイサービスの開催

- ・クラフトテープ教室を元気クラブのばあちゃんが講師となり、子どもたちが参加し、デイサービス利用者も楽しむ。それを SNS で発信し、デイサービスでパステルアート企画にもつながる
- ・障害を持つ方が集まってセルフケアを学ぶ会
- ・サーフィンの大会でマルシェをやって、そこに地域のおじさん方の野菜を売り、子供たちがお手伝い
- ・まちの事業の「認知症対策カフェ」→ごちゃませ会
 - 地域のしっかりした部会でなく緩く心地の良い場所をいっぱい作られれば…
 - ごちゃませ会では重度の認知症をもつ利用者にも居心地の良い場所に。ユニフォームを来た人はいなく、みんなと交流できる。一人の人としていい場所になっていた
- ・ふらっとカフェ:野菜作ってるけど廃棄しなきゃいけないという住民+英会話教室の要望
 - それを組み合わせ、フライドポテトのでる英語教室
- ・メイクアップの専門と遺影を取りたいおばあちゃんのマッチング
- ・無料フットケア教室
- ・地域からいろんなことやってほしいと言われ、それ同士がマッチングしている

○株式会社おでん

- ・教育、福祉、産業経済は、暮らしに不可欠な要素であり、地域でお金が回ることが必要で、地域でお金が使われる仕組みをつくることを目標に設立
- ・子供を育てる親や生きづらさを抱えている人、元気な高齢者などがちょっと活動することで、生活の足しになったり、生きがいになったり、教育、食育、活躍場所となり、全ての人が参加できるコミュニティになることを目指す
- ・このような全ての人が参加できる主体的なコミュニティがいろんな地域にあれば、将来子供たち世代が帰ってくるかもしれないし、認知症になってもみんな対応を知っていて暮らせる地域になる
- ・大事なことは、それが集落に合った拠点であるということで、地域のやりたいことを無視しないこと、集落のことをよく知ることが一番重要である
- ・厚真町にある、暮らしを支える 4 つの個人事業に、協力隊や行政サービス、教育などといった社会資源が連携することで暮らしが支えられることが基本理念

○役割

- ・きっかけがあればだれもができるので、そこを裏で繋いでいくこと

○このまちで住み続けたい

- ・自分が住みやすいようにするにはどうしたらよいか？
- ・どうせやるならみんなで気のおけない仲間で何かやろう
- ・気がついたらわがまちわがことのまちづくりになっている
- ・成功も失敗もなく、自分でやれることを、仲間と一緒に楽しくやってみる

地域懇談会

司会 ・石井 旭 氏(北海道立総合研究機構)

・神長 敬 氏(歴史地域未来創造 株式会社 やまち)

○問寒別地区地域活動の紹介(事務局):地域懇談会を前に、問寒別地区での地域団体、地域づくりの取組の一部を紹介

- ・おひさま子育て会:お母さん方が主体的に放課後児童クラブを週一で運営
- ・食生活改善推進協議会:大人も子どももみんなで料理を作りながら学ぶ
- ・PTA:廃品回収、クマ対策の草刈り、餅つき大会
- ・ワラベンチャー問寒クラブ:子どもたちに自然教室を開催し、地域愛を醸成
- ・新しいイベントの形:問寒別駅開業100周年を祝う会(有志)
- ・盆踊り:協力隊や地域の人で出店
- ・といかん本音トーク:様々なアイデアを出す場
 - といかん・みんなの市:リーダーレスで準備もその場でやって持ち寄り販売
 - といかん共同果樹園:農業引退しても活躍できるような新たな産業づくり
 - ごちゃまぜたまり場拠点:地域拠点を考える場
 - といかんシェアハウス:みんなが暮らせるシェアハウス構想

○地域懇談会:参加者からの質問等を回収して講師と懇談

Q移住者が多いのはなぜか? なぜ山村留学したのか?

→山村留学前の親世代が自分たちのことは自分たちでやろうという上美生気質があって、その頃に「たらんぼの会」という団体で本州から移住者を呼び込むツアーを開催しており、応募者がいればちゃんと面接して受け入れていた土壌があった

その後山村留学を開始して、まずは里親留学からはじめて、後に山村留学センターで子どものみも受け入れていった

子どもが小学校へ入学したら、池田事件などもあって、厳粛な管理型社会になり、通学の決められた時間で学童などに行けず捜索隊が出るようなこともあった。子育ては放し飼いにしたかったので、北海道が好きだったので、ピンときた上美生だけに応募して、そこがダメなら諦めようという意気込みで面接にきて、山村留学することになった

「たらんぼの会」は、学校が無くなるかもしれないという危機感があったわけではないようだが、制度をはじめたら廃校の話が出てきたので、先見の明があったということ

Q移住者はすぐに地域に溶け込めたのか?

→北海道は移住者が多いからか、開拓精神なのか、排他感もなく放っておく感じで、それほど抵抗はなかった。困ったときに助けてくれ、押しつけがましくない

Q北極星を決めて、今、取組が北極星にかなっているかをどう評価していくか?

→細かな取組ではなくて、ビジョンマップが北極星で、大きな理想形をしっかり持っていて、そのために何をしたらよいかを取組であり、優先順位をつけてやっている

QNPO法人と学校との関り(山村留学)などは?

→昔はみんなで作り上げた感があったが、今は、組織感があって、NPO法人としてももっと携わりたいとは

思っている

Q参加者が若い人も多いように見えたが、問寒別は若い人が参加しないので、どうしたらよいか？

→もっと若い人にきてほしいと思っていて、取り込みには悩んでいる。自分たちの仕事として地域づくりをとらえて参加する若い世代がいて、それは、地域の文化なのかもしれない。若い人も自分事でかかわってくれている。最初のコアメンバーは頼まれる人が多かったが、年数を経過してよりベストなコアメンバーになっていった

Q最初の仲間づくり、どう進めたか？

→ビーチクリーンをやっている人や近所の草取りしながらこんなことしたいよね、という話から繋がっていく人など。元気クラブメンバーは、以前からこんなことやりたいとSNSで発信していて、それを見ていた人が手ぐすね引いて待っていた。組織を作ろうではなく、ぼやきや発信からはじまって周辺を巻き込んでいった

Qつぶやきを発信する場が大事？

→つぶやきで十分。組織にいと住民から求められてスキルがないと鬱陶しくなり、社協は行政の言いなりになりたくないなど組織の弊害が大きい。困りごとを起点で、自由な住民の立場で楽しいことしかやらない方がいろんなことができる

Q地域の資源を把握して、コーディネーターに徹しているのか？

→人が大好きで、厚真人(あつまじん)と命名して人の話を聞くのが大好き。話を聞くとお宝が満載で、それを拾い集めることが趣味レベルで好き。組織で学んだことはやり過ぎないことで、やり過ぎると住民がお客さんになっちゃう。黒子でよく「刺激、拾う、ぼやく」が重要

Q無料で活動を維持できるのか？

→社協退職時に事業計画を作って、役場で配ったが、1年間は予算がつかず、札幌のNPOサポセンから20万円助成金をもらって活動し、それを行政が見ていて、今年から介護活動に月1万円補助してくれ、町の広報誌に出ていた認知症カフェは上限14万円で申請した。行政にはしっかり活動をアプローチしている

Q行政との役割分担はどう感じるか？

→行政はセーフティネットで、広く住民に行き渡るサービスが提供できることを被災して痛感した。行政は住民自治を主導しないこと。行政は大多数の方針はできるが、少数派には届けられない。そこが民間の役割であり、震災2年で仮設住宅を退去できたのは、行政、社協、民間の役割があったからだと思う

Qやっていて途中でやめたこと、軌道修正したことはあるか？

→除雪の社会実験をしたが、やってみると要望が多いのは排雪であり、意外とやろうと思えばしくみ化できるなどと思って休止し、交通問題を優先した。有償運送やっていくのは難しく、年数かかることから始めることとした。お店はやめるわけにはいかない

→元気クラブの会員で、自分は認知症になるだろうから、ご近所さんが送り届けてくれるよう、自分の取説をわかってもらうため、勉強会を開き、結果として認知症の理解が深まって、地域でWS開催。その最終形が今のごちゃませカフェに繋がっているの、形を変えていっている

Q一度はじめて継続しなくちゃの義務感を持たなくていいか？

→義務感を持たなくていいが、負けたくないという想いはあって、結束が強くなる。悔しい、やってやるぜ、という感覚はある

→「ねばならない」は苦しくなるのでダメ。何くそ根性をもっている。社協を辞めるときは、いろいろ言われ

たが、何くそ根性はあるけど、ねばならないは邪魔になる。楽しい気持ちで続け柔軟に方向転換する。組織は継続するためにはめ込み、事業のためにやって、目的が変節する。自分は組織じゃないから、誰のため何のためにやるのがはっきりしていればできる

Qこれまでのまちづくりは強力なリーダーシップが多かったが、お二人の理想のリーダー像は？

→みんな自分のできることをやっていく、同じ方向を向いていく

→結局は自分ひとりではできない。組織のときはちゃんとやらないとと思っていたが、そこが大き過ぎた。一住民になったら一人じゃできないので助けてくださいという側なので、あえて完璧にしないと、みんなが動いてくれる。黒子に徹してやる、それぞれが個で自覚をもってやればいい

Q二人のエネルギー源を知りたい。問寒別へのエール、アドバイスは？

→ここにずっと住みたいけど、無くなっていくと思ったのが出発で、大都会では自分の意見は反映されないけど、小さな地域だからこそ自分の意見が実現するかもしれない。生きていくのは楽しいし面白い、それがエネルギー源。仲間とのやり取りも。問寒別は、9月に来てみんなが自ら勝手にカレーづくりなどして動いていたので、また、気づいてないだけかもしれない。十分地域で動いているように思う。地域と地域が繋がると元気がもらえる。行政が地域運営組織と言えれば難しくよくわからないけど、今やっていることが地域づくりになるので、あまり難しく考えずにやっていけばよいと思う

→人と関わり得られることが自分の糧で、見たくないもの聞きたくないこともあるが、ちゃんとそこからも学べるが、一人じゃ学べない。活動している仲間が笑顔になるのが自分の笑顔になる、それがエネルギー源。しなきゃいけないというものではなく、目の前の暮らし、心の声を聞いて、それがまちづくりに繋がること、自分たちが楽しくてやっていることが結局は形になっていく。今後、おでんのメンバーと問寒別に来て交流したい

芳野委員長挨拶

本日は、たくさんのご出席いただきありがとうございます。

講師のお二人からも、素晴らしくパワフルでエネルギッシュなご講演をいただき大変感銘を受けた。皆様も感銘を受けたことと思います。

問寒別も100年前に夢と希望を持ってたくさんの方々が集まってできたまちですが、ここ最近急に過疎高齢化が進み、今やらなければもう間に合わないくらい危機的な状況になっています。

今日のシンポジウムに参加してくれた住民と共に、まだまだ意見を出し合いながら、今日のお話しも参考にしながら、これからの問寒別を盛り上げて地域づくりを進めていきたいと思っています。

黒子ほどすごいものではなく、北極星を見つめながら、皆で同じ方向を見て地域を盛り上げていければと思います。

今日のお話しを聞いただけで終わりではなく、行動に移していかないと意味がないので、引き続き皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。



(野々村町長開会挨拶)



(会場)



(蘆田氏)



(村上氏)



(地域懇談会)



(芳野委員長閉会挨拶)